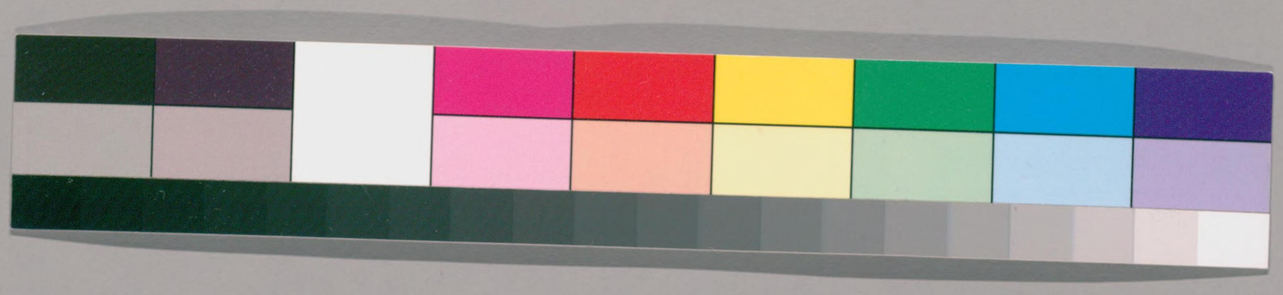
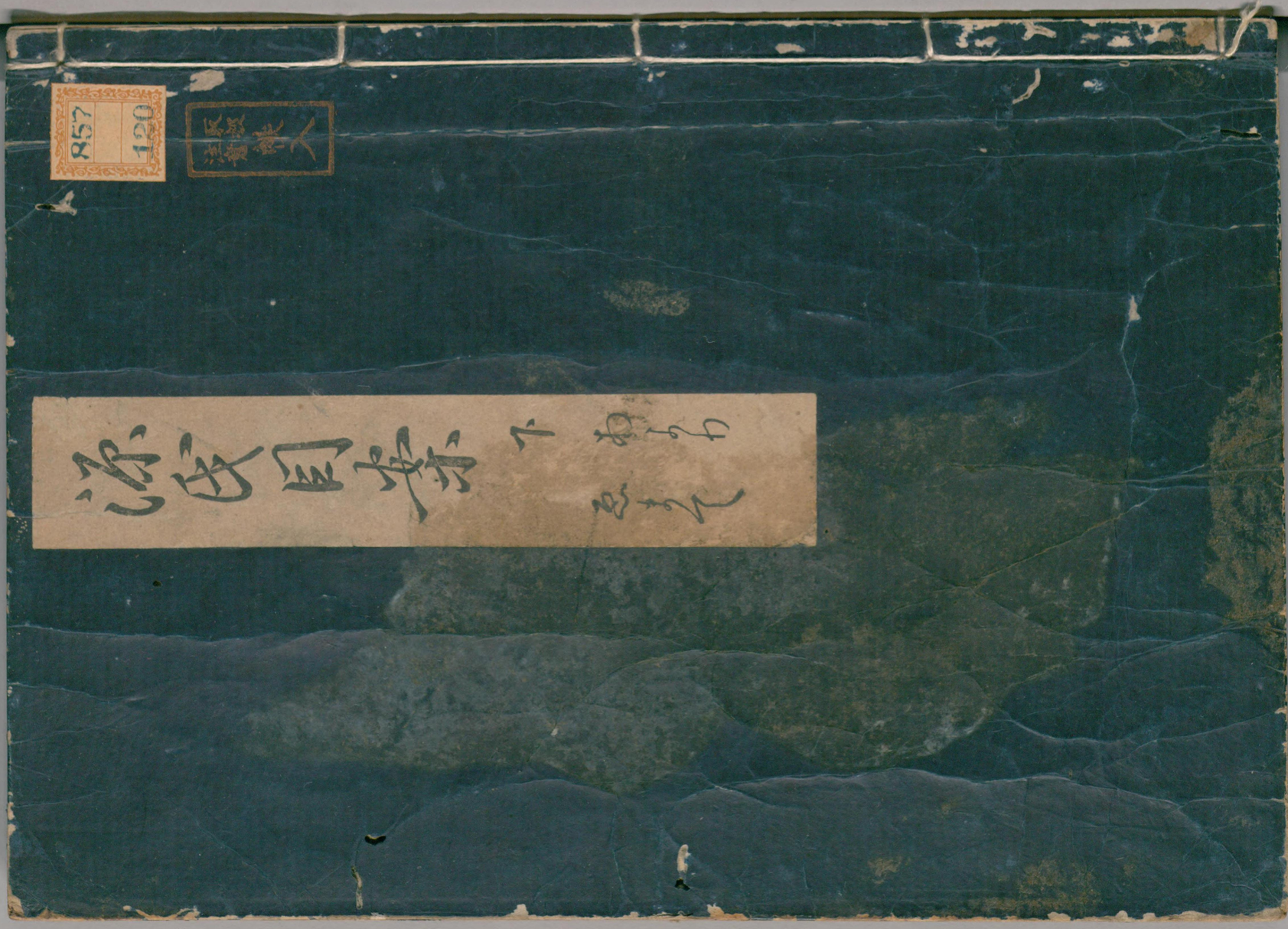




ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 857-120

857-120

源氏目録巻六

あ

一あつしく（きりつぼ）　めるむるど云心や　靈運（タマシヒ）　當遷（タマシヒ）　日本記

一あるそぞ（ノック）　不定（ふさだめ）るせ　おもほえるそ云心や　又

一あちきなう　無為（ブイ）　無情（ムゼウ）

一あるべき　無為（ブイ）　無情（ムゼウ）

一あへなく　無敵（ブテキ）

一あやし　怪（クワイ）

一あらさ風（ノ）　吹（フキ）

のすゝ（コハギ）荻の源氏の物語

一あさましきいさゝかる心もるさゝや

一あさぐれお　禁中（キンチウ）　朝餉（アサカレイ）の間

長根哥

そて二ちあるひ山ゐて腊(ロセ)を御(ヨロ)や早朝(ツタ)まいりや常(ツネ)の供(グ)
れる人あまず神(シグ)借(ハシ)や著(ハシ)をいうにもそくそくてあるる女
つや、つそく著(ハシ)をおして立るさいくちおそ(サウ)いくち
一あるるる仇敵(キウテキ)
こまうどの礼をるるや
一あるるるしそれと あるるす
こ云るるや
一あるれ 不足(フソク)るや
一おまきるさ あふ風るるさ風や徒様(ニラウタウ)るまれぐや
一あぶうく あぶくるるや 一あやあるさ 意地(エチ)
一あるめて 当(タウ)
一あるまる
一あま 音(ネ)いれあまて皆(ミナ)ハ髪(カミ)をすまず、おるひさいぐるぐ
るるてあまたるるや、さげあまをあり皆するそいなし

一あいぶれこ あちさるるこや
一あくれ あるるや 一あるるる移徙(わたまし)つるる心や
一あるぐるるる よれもれ
一あへまり あるるや、あへ地(ち)云ハあやう物や
一あぐれされる心や 一あくまて 不定(フソク)をあるるや
一あへりる 公雲(くも)うめるくひるびるるさ心や
一あるるるるる 俗(ぞく)よくべるさいまし、あくるをや
一あぐめ 阻(ソ)せぐあるる心 一あいぐやう 愛敬(アイキヤウ)
一あやもるめ 綾(アヤメ)周 地のあれのるれのをるや
一あかる風 うまるさいれ心るる
一あるる 饗(キヤウ)食や あるまいさや

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 857-120
ガラス使用

一あてそう　あてやそうづ　うつ
一あそん　紀(アソン)たや　紀(キ)寺とあげて　涙のつひのみや
一あて〳〵貴(キ)〳〵や　一あこ　倍(ゴレ)手　我(ガレ)　小(アコ)ぞと云　女
一あそ一本ようてあこと云や　一あそうけ〳〵　あつ〳〵そうさ人
の心あそれと云や　泣〳〵いよ
つけ〳〵ぞ云〳〵　袋(タイ)す多
一あやそく　あいそくや　一あそもう　あそくそうそや
一あそもう　阿闍梨(アサリ)　安恵(エ)内供奉(ダイグブ)　慈覚大師(ジカクダイシ)の孫(マゴ)　天台座主(テンダイザス)
五位補(ゴイノフ)二阿闍梨一　一あそうて　そぞろ心や　孟津(モウシン)たい　馬(ウマ)
一所　あさ霧の　源氏のいそぎ出(イデ)
三(サン)人(ニン)のすいれうや　一あかい　菜(ナ)肉や

一あかそうて〳〵拍子(ヒヤウシ)　ふそう人をいつむかう面や
一あ〳〵それ霧(キリ)ふそうあ　朝露(アサツユ)に　貪(ムサボ)名利(ミヤウリ)夕陽(ユフヒ)愛(アイ)る涙
白氏文集
一あそ　一あいぶれそう　あい〳〵そや
一あ〳〵それ霧ふそうあ　一あ〳〵そをあゆむ
一あそれあ〳〵うもそげそう
一あさむ礼　歌(カ)ざまれや
一あかう〳〵　一あそうてまそう　阿伽(アカ)焚語(タキゴ)
一あさ心　まの詞(コトバ)は雅波(ナニハ)津(ツ)

一 所々心ある遠ざまなどをかき
一 おほどれ 草の紫などをそへて
こいろいろこいろ立ちまぜ これも立ちまぜ
一 あるじ お前の方ざまそへて
一 あるじ 釣殿 一 あるじ
おもだちなどのさま あしずまひなどいふがごとし
今版のものがたりに赤色などいふは
風俗哥などあるを詞やうべきを
うたを書のやまとうたをべし 其用はこれにて
一 あしもとそのまへあるべき
一 あるじ 大御ざまにて 垂衣などを

一 あるじ ちいさい 亜衣などを
一 あるじ 中将 これを恨むるなり
一 あるじ 和泉式部 伯名記
くそてどうけ 東坡詩云 摸扇 推逢春夢婆 作れり 善
美婆 女の異名也 唐土には 史女の物をもつ
扇をもちふるなり 合歓扇などもいふなり
一 あるじ ちいさいさうしなどぐるま 洁井
物などをもたせ 物をもつ
扣いこをぐるまの扇 女房の
車方にこなたざまへ 包み糸にてそをむすび
あるじ 結ぶ 一 あるじ
一 いろいろ山ぐちなどいろいろ結びたるあるべし

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 857-120
ガラス使用

一あじろのすこしなれたる下すだれ也。花(?)凢車ハ唐庇檳榔
庇・毛車などハこれ檳榔也。ともに居眉・半蔀・網代などは
皆あじろをもちゆ。今いふ見すのあじろハいづれと定がたし。惣
居貸(?)にハあじろ末濃の下すだれをかく。あじろ車にハ下すだれ
をかけざる人ども。女房の乗用するにハ八葉の車なども下す
だれをかくるなれバいづれにても其遠なるべし。すべて
あれたるハあるびんなりや
をおもふなりや

一扇のつま紙おりて。桧扇のこと

一あさころもや　さる人の田子ハ泥
中にあさ衣をかけたる物也。其もそのつまそハ山田のそうづを
ぬるしゐをよめる

一雨ごとにすそもぬるとやすみ
文選　巫山之女朝為行雲暮為行雨

一あをむまぞうにて中宮へ引給ふ也。寶亀六年正月七日天
皇御楊梅院安殿設宴於五位以上既而内庇宴進青馬
馬略ニ河海ニ委

一あふみちかき　此物語第一巻ニ見ゆ
さ凌成心女なる也。そむるゝつれなうましせバ涙のこぼるなつきしとや
悪実やうにいひなしたる也

一あけぬ夜の心まどひ　夢の給や

一あさり　求食也

一あき人のあつかうて　これ　琵琶行
長安倡家女嘗学琵琶於穆曹二善才年長色衰委身
為商人婦

一おそひらも　婬女成べし

一あげまき　童の馬手飼也。此の総角なりよそや。童の髪名也。
文車とも云

一あべのおほし　安倍多行
書物に云略也

一あかいろにさくしばされのりさく

えもいはぬ童女の上ともこそ物や水手めくのやうなる物や赤丸乃
うへさうに掛がさうのうざこ紅夜ぐつねい胥袖やあこめい二ともも
さまある物や袈ぐうれい面うは紫裏萠黄をさや
一あまびこ そのもや三蔵まで用て活る所をさも
おろしや天児 一あふひ 火
一あふ〳〵ゑめて何ごと人のうへにうらさ〳〵ぶくさ〳〵ぶ
六位のい緑の袍あをびいくら文元服されも
何くれと忠ふるうへいくら 一あぐら行 化粧
一あこえ 袖 一あふひ 火
六位のい緑の袍あをびいくら文元服されも
えうち奏とする心もち北下へ立ぐる境地元一世源氏ない
もの庭侯や位下もれいあけの袍ちるべし 乾鳥妻

一あぐみ川ろくろく 学生の入学の時文章院の堂塩ら書ぐ
もの名落ちあるかと書や聖廟れ字い菅三三品清行ら
い三帳とくちゃ夕雪の字も添ちるべし
一ありまさうそうそうぬい天照大神ってまします文人もうある
防い天人や鮮明を ー一あ紙ずらの紙 紫ぬの袈裟
迅日い赤色唐衣寅日い青色唐衣辰日い青摺唐衣赤細比
蔭鬘ホや青摺い小忌のうや源氏の君文やうを辰日
のうれい青摺衣のうて お節ぐ恵色し書うや青ぐらの紙い
一あ紙のうれいちくぐれ
蝙ぐらの唐衣ら 一あ紙のうれいちくぐれ
掛下袈裟衣面い普通や裏い掛や青色い麹塵衣ら
一あれうをあくぬ紙うをあくぬやいちまぐひや

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 857-120
ガラス使用

一あしこしそぞろづく　蛭子・父母など捨てられしをおぢの
男のふようそくていくち　一あさ茂田のうれそうあれ
海賊いと大波ようう見そうそや　あさ茂田あれど白やうあれ
やそうさういわうさ紅のういわうさや
一あふようううう　奥の字や　打くいあうふやうるこうー
うそや　昔やうれそ給や　一あうべどいふよりを
あうふ人ありあうずあうふづ我男よいまうさうあ
ひ平工昔ようううべうず　思して数言の哥よあうべと云句を
ぬ訳由れ　やとある所より中れ文字ありべ
一あれそれうれ　そそれはや
一お代いろのうへぞうふうさうづうれのうあれ　李ア王記湘亭

人装束　綿ノ冠　麹塵ノ闕腋袍　白下襲着深皆持　白杖　両宮
襲束帯ニ云　青色麹塵袍　白下襲半臂　白石帯　深履綿ノ
花白袍　今束帯青文ヲ云　半臂ヲ云
尉ト云ヲ袋持ト云　二人ハ緋袍ヲ着スル由ヲ云　白杖ヲ持
人ヲ云　笏ヲ持ヤ　童ハ緑靴ヲ着ク云
一あくう　胡床ヲ　日本記ニあうこと
うう行ふ　今モ警ヲ云　胡床ヲ云ヒ
一あふ心どう心うさやや　一あれどうあんのどうくやや
一あうれすそこのや　檜ハ面高文ニ裏青ヤ　すそこのすそを
紫ニ染ヲ云ベシ　一あいどうさうさ愛遣ヤ世俗
あうそうふ云ヒ　一あうんやうれやうれあうち染ヲどう

落胤腹也
のさうる也
一おもも　歩行也
古ふぐらひとうぐるひーかがられてうへて教ごろもさん。
ひ哥うて心うべー脇者の衣をおしあてゝ内方れ女すおうろ
一哥おさ日さす　天子を初日さや　実仕うる名也　我を忘給ふる也
一哥狂うて　おさられと　けうるうべきを尺　急を乱つよせてうや
一おぢうびのうーめき　弄問うー
出うる織乱問さうめのうーめさうや　綺うた
風流の時用る物愛也　合點一狸也
一物うえ　おすれれおうそび　裳着これ

一あくあうぐひすも　秘曲ども・のやも

一おぢろれ車れむり　掛て　昔れまびあうされ・弄ぶ・のす

一おくとかふふさて　老者のう随ぬべし

一あうる　うるや　一あうるる

一あくれれあうれのう　あうれといるうる

一おづまおうそびの　神系の名や・和琴お

一あ代うびのおうて　折枝の面う

一おそづのうさうて・代文位装束や・美

八茶碗の名や・まう文ふ仰う拘や・楽

一あうくうす　尚れ文のうをう

一おをう物のうざ　花おをようりぐ

一あうる　仏ふ時　花とて・けくの花

一あるんびうう　大論云・釈迦仏入涅槃之後阿難登高座一諮

集法施之時其前仏仏衆仏等皆給阿難言盛四位之人

や仍阿羅漢ホ不用之其時阿難自統現獨

うくうやう

一あうう

一おうさうくうづく　なのうふふ・おをうさありうさうくうづくふ詠そ

一おうれさゆうやう　世皆不二寧国一如水漂泡燈　法花経

一おうさうむくさ代のうて　おううの遠花や

一あう多のうれ名祖　今れすそ

一おくのけのれ仏を　六文のおづうう

一あうう代馬ようけ　後馬　移の鞍・陪従汗馬よくや

一あうれ　仏ふ時　花とて・けくの花とひうる

一あるんびうう　大論云・釈迦仏入涅槃之後阿難登高座一諮

集法施之時其前仏仏衆仏等皆給阿難言盛四位之人

や仍阿羅漢ホ不用之其時阿難自統現獨

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 857-120

ガラス使用

一 竹川 あかれてふ　姫君いふ人に命せらるゝ事そのたまへハ世に名たゝずとや

一 あけたゝて　八宮世のうきを宿せられたるハ真実心のさむ給へとん

まハあるねばとや

念仏にや

一 秋の果つるを　四季にも七日川との

一 有明の月　十六日以後ハ有明なり

へし国房続日本記に十六日以後ハ暁月と号す

一 あかきあとで　扇に女とんふるあり故に此書ア．此ところ也

此方也．月隠重山兮擎扇喩之　朗詠

一 あさぼらけ　あさぼらけとは山宇治にての名所也

一 あじろ　網代　河列田上よりとれるを言わる

一 あしろ屏風　昔ハ山呈あとのためしさ調度には定まり見．

藻骨片面を張て細組にて内合せられる物なり．網代屏風といふ．

又ひあしろは屏風と云物なり．車のひあしろは竹をあくろ物也

一 あげまき　あげまきには大君と中の君ひあへるならんいふ心也．催馬楽の哥をとりて詠む

一 あしずり　蹉跎　文選　ゆるされしてかしまろぶとあるを

一 秋さむる　秋はすさましきも過びらるやうに出て言ひ見しるへし

一 あてひとも　実ある心也

一 あつまあそび　東遊也　花鳥余

一 あるところ　古今　柿下紀僧正遍昭．花山十一年出家

嵯峨帝昔行をとまりし所にて内院経傍教十禅師にて補をられ

るさと云ふ

一 あまいらむ　寝殿の新造

一 あわさる物　障泥　鞍也

に有とや

一 あまそうし　浮舟の力をあげし明日に見せ給ふ日宇治院にて

御浮舟をとり付し也

一 あるしが　亭主めくや

一冊 おそれもの おこがましきを
るもあめりとよめる 一冊 あ
一冊 おぐるめく 姫君 ありがあぐ
一冊 秋ものゝ 此冊ゆく過のあまりて
ありまじきことゝいふ注 宮よりうち
一冊 おま衣 きぬ一 世氏物語 の袖也
思ひんとつゝ 一あ
一あのきう 愛執也
さ
一さうく〳〵 曹司 房也
一さうめさ 尋言 方さやく心也
一さうく〳〵 賢 かしこき也

一さうく〳〵 さびしきこと也 河 寒
一さうめさ 尋言 方さやく心也
一さうく〳〵 さとき也
一さうく〳〵 さえ 冴也
一さうるて 惑也
一さうを 煩也
一さうやすさ 心安きこと也
ものをすてゝこゝろぐるしくおもふ
心をもたせてうけゆ
一さうぐる 涙のこと也
一さうあるさ
一さうぐる 袖のこと也 涙の
一さうあるさ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 857-120
ガラス使用

一さうもさうの巻
一さうず 流石
身自人也
絃の琴也
一さすがん 龍鐘也 おらづれ
一ざうごう 雑変ず ざうくのもの
一さくもれ 嘸 ひつまいひつさ云
一三史五経 三史い 史記 漢書 後漢書
傳 尚書 周易
一さうもう
一み身のもち 身分 皆天皇 菖蒲のうづ 作 武徳殿
行幸 閑手 手 管會のもの 文 望い 毛詩 礼記 左
一女郎人 綾 傘 群 ミンシン
ゆあち
一さうやうちうこ 神也 細 許
一さうそくて 打 ちくて 内 ・ 也
一さうぐさくれ 也
一さうげで 遠 ざけ也
ゆやうのすぐさ也
一さうぐげい いそさ 風也
一さうもうさやうれど也
一さうぐさくぐ いそれ 外 紀 の事也
一さうぐうさぐそ
女郎人 綾 傘 群 ミンシン
ゆあち
一さうやうちうこ 神也 細 許
一さうそくて 打 ちくて 内 ・ 也
一さうぐさくれ 也
一さうげで 遠 ざけ也
ゆやうのすぐさ也
一さうぐげい いそさ 風也
一さうもうさやうれど也
一さうぐさくぐ いそれ 外 紀 の事也
一さうぐうさぐそ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 857-120
ガラス使用

それ物のついで用心や　変化の物うつそしをのびおわするれば
一されうやとて　そやれうの数や
一さくまうてあとに　うつてあとに　うつくしき童女や　一統うつくしき
のかつれうる童みところべし
一さうべきもれつてすせ　ものむすめ
一それの寺そばちの
前播磨守護や　ちかい親戚や　和歌心の客や　明石入道や
一さうれ　去ぬや　近ぬや　一万葉よをとりあつめ
一さいう人どもや　一さいう人どもや　何暇

一哥
一さうれ　ゆうべこそ　ゆうべこそ　ゆうべこそ
一さうれもえ　筆
をこや　中さうも中ぬや
へども
一さうら心もるさ人もれがようさまてあそび物と源の心や
一たまつ　須門のめと　須門のめとあんあり　弟二　大武　弟二　右清門や
一さべさ　さうべさや
一哥　さうべさ　ゆうべこそ　いそくの里も月へ
いちよ心もるさ人もれがようさまてあそび物と源の心や
もそくむ心や　入れ山　鉢馬の名有れや　寒い月の入山や
一されろくる　たれくる前時よ物をひもとおうもれ心や
一さをよ　小まや　さうして

一さゝぐひ　饒荘子やをそゝぐひやし

一左近令妙ひごのうねへ　皐のおろさん人ゆゑ

一さもおぼしめさず　花ひ一枝の行ふ法あるを表ぞうち来

つむそそそうをめづゝくこゝろやし

一さわや　それざゝそそいひ詞ありをし

一宰相中将　参議修行事　近衛十六年　幸子院　法皇

御賀　承行之後　保忠　其時参俳　大弁

一さんざゝまうて　参座　年号のゝ

一さんのゝち　寿　弘徽殿南おもてをちたる廊を　承香殿

一さゝれゝれゝれゝひゝ　伺申奉参るもあり

今栗ひ物ゝ二ありおもむ心れよるひのゝそありれ

きはゝれをいかゝそも　設いをゝれをも

物やゝをゝをち物の二ゝ　物のごく

ゝおわゝれいゝてゝれうへのそ屏をゝ

のゝれき代面白ゝさゝれをゝ　藤芳

一秋文　おのひゝ　秋文　ト定

秋ゝをゝ　寿　秋文いれ代ゝ一ゝなゝうゝを

秋文のゝ上定ゝゝこゝろべゝ　秋文の起いゝ仁天皇廿五年

丙夜三月　依神宮ゝ託宣奉祝　伊勢国五十鈴河上ゝ津立皇ま

儀如今着ゝ条給是　秋文始也　河海ま

一秋院　滅天皇　弘仁元年置秋院司ゝ皇女有知内親王ヲ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 857-120

ガラス使用

母交野女三品親王に准ひ、神皇式云、仁秀皇即位に宮に賀茂大神狭工衝
簡内親王未嫁者に宮

一訴えたる法門のつき　右法門のつき
さるめりて法門裏の使宣の
らん、さてへつをおこすも、覚かた法門有へしとて、和て許さるへ
数隆説云、伊勢へ
多有る、大内裏れ給ふへ
右考有る、近隣狭限
こそ、近隣もつかわ狭限もつかい東庭屋にて毎もつこと、今絶
もつれ、或説云、右考のつき
一さ〳〵も四に加九入るや　一さ〳〵有る

一三の星れかの　三の星の外に随行ま
十一月中長至夜、三の星の外遠行人、若為独宿楊梅御冷粉草
床に病身　文集
一粉迎半尼仏弟ま　弄金剛佛
子某ぐ云ぐ〳〵の心や
一さ〳〵ひさして　右傍云云卿
北三王今に不越境
一幾瑞も奇怪も
一さがれつへて女め
文のよてお、一苦れ
一さけもの〳〵　殺の字や
うれへもある心や
一さやう〳〵
法氏の放院れ、
一さ〳〵て　前や、拍

一さいの人々や　一座のとゝ〳〵　寮試の
日の長幼をさだめて席をさだめて人の種姓いろめや故に冠者の
名をも字生すれ来座よねのみなりけり
一さゝ〳〵そうをそゝぐ〳〵ろ　弄　さゝ〳〵
一さゝ〳〵れはそゝぐ〳〵よけやゝ〳〵うるうれねうそへて　倩は面白書
えび燕や　これをいふすさ　紅のあや
一さゝ〳〵うをもち物のうちさ　行文をも
うめうそ
一さゝ〳〵ず　さうがちうも　さし
そゝぐ〳〵そ
一さゝ〳〵そ也　舟の製来也　屋形の
おもひ幡の幔もぐ也
一みる毎よもうわへをみりよ
一さゝ〳〵れ　菖蒲は面青裏

一さゝ〳〵のはさ　さゝ〳〵や　弄　欵冬の額よさゝ〳〵めべさおよ
さゝ〳〵さゝ〳〵　一だめ中将の名をば夜つ〳〵の勝
さゝぐめ給也　在原業平が女ぞ
一さゝ〳〵れるを　字は恋衣の裏ろさ穐芳ありを倩文をや
一欵院はれぐ〳〵て　欵冬はれ一代一度・欵院かな牙よ眠あれぐ
おもものう
一さゝ〳〵ぐ〳〵て　もと立〳〵てや
一さ爾くれのうぐれき　童八汗衫ぞさゝ給れぞそれをだにぬ
引とゞ也　猿未起の聖徳太子　秦川勝よ仰て作二六十六番面一
人〳〵る内裏禁宿奏曲をゝて　菜をゝろ　千時太子望其神
永字神字をゝて　名なて　申楽をゝふをゝろ

一さい人々や　一座のとゝ〳〵　寮試の
日の長幼をさだめて席をさだめて人の種姓いろめや故に冠者の
名をも字生すれ来座よねのみなりけり
一さゝ〳〵そうをそゝぐ〳〵ろ　弄　さゝ〳〵
一さゝ〳〵れはそゝぐ〳〵よけやゝ〳〵うるうれねうそへて　倩は面白書
えび燕や　これをいふすさ　紅のあや
一さゝ〳〵うをもち物のうちさ　行文をも
うめうそ
一さゝ〳〵ず　さうがちうも　さし
そゝぐ〳〵そ
一さゝ〳〵そ也　舟の製来也　屋形の
おもひ幡の幔もぐ也
一みる毎よもうわへをみりよ
一さゝ〳〵れ　菖蒲は面青裏

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 857-120
ガラス使用

一 紅梅也
うちうれうことをうくてそう
一 おまえ
うえいおまえと書心内丸おとこをふとよ
一 さうべきう
一 そひうべーとうう
たまと書公卿のうや呼
一 梅うえ
さうえの集雀院 義平門世弓
院とや今集雀おうまゆよ
一 さうべえ云うえうえうや
ひ古万葉のう拾物さるうず是
考え丸さうみうえをう伊うよ古万葉
これ世中に ちうやみうえうれが邦代ち

人の手紙うきおうて万葉集とるびけて
ち紙ひうといみうれあうえうえそひて
一 焼臧門のれ撰丸
一 さうえ唱哥や
一 のひーは そうえうめれうえひれ
一 さうつぎ秋好中宮 女三を次ぎいえ
一 さうえのれ堂うて葉明仏 見二松門巻一源氏の建立 栖霞ち比
すう丸 葉明は寿命ていのうやえうる
一 さいそうひうえう 家勝王経 金剛般若壽命経 河
一 さうべくを笑ひうえも 四十の賀 小浪 経会 の例多 花鳥 巡宣云
八貞観十七年 学ー賀ーおて 薨 信云 延喜十

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 857-120
ガラス使用

九年四十賀おりて七十歳まで
つとめすくもすくもさぶらひけるや云ふ
一さごのかの岸よ 沙婆和也 善財大仰僕よ 登到祇陀園 拜礼文殊 一度入天心九
一さるのそうそうとうとう
一号 さすが ささる哥べし
一さるまうろう六時の念仏 一号 勾
あいあもや 神社のあめべし あいおつとめ
そうかごし 此心中物心よ 落よあひて
一さるくちやう 陽杖也
一三条西と申ごとに十四日て うつされ樣のうへと云考よ 花のか

ちごい字のおほいあいてうりうこそ
一さをしうれつまにするる 萩 きおうり
一さうべきさくやおりけん 宮仕 さいしやう
一宰相の中将之 秋中納言 物語 わかい
のれ程をしこその年 秋と心うべし
年 なるを 並 廿歳 秋と心うべし
一さぐらわれいこそべき 今始 さぶらう
ひんしなりん物をや心のそ
一号 さるこそ さそぐちもあけて 泣 ひ
おりべきさの心や 一さうれ院 源氏暁 さが
一さぐ 倍 さぐまや 一さ

一まうて渡うをみるうち也 暁 天皇大宮寺まうで道せうし
一ひしてうけう
一別当いそ系大史うべし・右系うこ大史也 禁中うて 奏乃
別当右大弁ちぐぬべし・等うて
一さうべし 弓の 蔓 よりて 矢 番 うて 懐中して
一退出や・それとうもと云 一さうち地のつくる 白 衣 のうへ 肌
一さうち 私 一さうしうく 雑事 うく 女房
一せいうう
一 寝 殿 を 改
一 御 前・四 方 へ 皆 出 し
一さうしうち 寝 殿 を 改
一 御 前 うて
一 里 びうち 上 筥 うて 車
一 里 れ 名 也 里 の 名 いうもという
一 さうべうち・ひじやう 私 邸 也
一 さうべうち 里 れう 心 元 身 毛 尼 家 一 大 途 入 吹 放 野 辞 半 引 テ
積 体 河
一 さいうん さうべうんの心
一 さうやう 難 役 也 若 草 総 角 の
一 ざけ 邪 気 也
一 さうべやうし 勢 物 也
一 さうそ おけそその心

一 さうべうんの心
一 さうやう 難 役 也 若 草 総 角 の 八 宮 也 竹 葉 ハ 隆 也
一 ざけ 邪 気 也
一 さうべやうし 勢 物 也
一 さうそ おけそその心
一 さうべうち 寝 殿 を 改
一 御 前・四 方 へ 皆 出 し
一 里 びうち 上 筥 うて 車
一 里 れ 名 也 里 の 名 いうもという
一 さうべうち・ひじやう 私 邸 也
一 さうべうち 里 れう 心 元 身 毛 尼 家 一 大 途 入 吹 放 野 辞 半 引 テ
積 体 河
一 さいうん さうべうんの心
一 さうやう 難 役 也 若 草 総 角 の 八 宮 也 竹 葉 ハ 隆 也
一 ざけ 邪 気 也
一 さうべやうし 勢 物 也
一 さうそ おけそその心

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 857-120
ガラス使用

一きりつぼ
一きいはいあしゐ　ここにつくそれほどれ際ぐわいそてちゃと
せ　そけまさちうちうそけあしゐみせ
一きしき　様式せ　一きうつぼ
一男しき　勅答山物絵よ　行きそ
そそもりそそ　又男そうそうすをもうそ
一きうつぼ　御息所　桐壺じ云せ　お舎の一せ　弘徽殿　麗景殿
宣耀殿　など代もて　行馬道つぎさもれぞおそれる
をもうせ　お舎ごりよい　桐壺　淑景舎　梨壺　登花
壺　桐壺　雷鳴壺　繁芳舎　この世
いづれも大内そ　物をそそそ　有相つぎ云せ　源氏の母御息

所の位のそる　一
一きさいの宮　后宮せ　一
いくる　一
一そそそみく　一
三位はおて法師の二周忌法をとりり　一
紙法　一
そそ〇い打衣もちぐそ風をそそ　一
一きそそきいと　男をもちそ　一
たちれそまぐそせ　一
物そそ〇て　一
一きそれ　そそれそそそ　一

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 857-120
ガラス使用

一きりつぼ　隣家へのひさし・やりみづの名也

一小山寺　南山くまでら寺共寺也・音八四十九院ある

一きりつぼ　低式官政官也　ひちもちいひちをいふ

うるうや　年大内花水仲ちう

一きやうあいのうへけうけのちう

ねりや　筏基　唐更　掻上蔦　掻巻のそく

一きさいでん　聖句童物　弟句ホの数也　枚壹八束八立后ガ后

ぐねよおうまでど　后句とのみ

一きりつぼをかりて右大将ちう人を名　何　狭頭　受後撰云女八の

みこ元良のれいなのる・四十賀しける・第の名をぞ

そじき

一きりつぼ　故学院のみやの

一きりつぼ　中宮のホの陣

一きやうはもちう　精進の方へいそぐ

一きりつぼ物のうちもち　物ハ非情ながら一日ハこ恋おさ

まほて気をもる・漢武帝の夏前物ハ一日ハこ恋おさ

けりゆへよ・人物を名づけもち・ふこ眠ぶるも云也

一きりそよ　ひげうれハ・雲をそへてや・ガ消そよみるをや・

うさうさハ涙の心也　一きりつぼねのすさまよ　鳳鳴松枝

狐蔵蘭菊叢

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 857-120

ガラス使用

一あれ是ハ荒きなるや

一きんもち　公茂　絵師。在高名録。采女正巨勢金岡公忠子公茂也

一きぬひけかるけ　松風の窓よりめしよせられたる物のけの物象なるれど。先あへぞ女の装束とうけたりしやうけ作の様の表よ。やの装束うけなりとんまて言かけ

一きいふけくきりくちなや

一きんぢくハ琴筆や

一きさらぎの廿日のほど　朱雀院よ行幸あり。非スフノ文字之時ニ行ニ幸ス上皇ノ宮ニ例　天長十一年正月二日。仁明天皇幸ニ朱雀院ニ拝ニ太后ニ同宿　謁太后ニ于栢殿見ニ東ノ亭ノ主ニ記

一手玉ゆらも心あかりく　花　肥前国松浦郡鏡ノ神も太宰小弐藤原広嗣霊也。又鏡山も神功皇后の御鏡化して石となれらぞ鏡山といへり。是をも鏡の神と云べきにや。下の句よ松浦なる清見の社やといへるよはて八石清水八幡と同躰のよし又鏡の神ハ鏡の神よ二の名あるべきよしてそ

一きすくの人まで。すくやかに

一喜春楽　呂也。双音は呂より律よりつるを云也。喜春楽は黄鐘調の楽也。平調よとりかへして用りにや。可然弄　くらき急律の呂となりつや。呂律次第

一行香の人々　花　鉢香爐塗香なとおつ人也。殿上人のするなり

一小柳そなくる　楊枝　北面ハ内侍の方也。南面を院の方とするなり

一公忠朝臣　号滋野井弁　光孝天皇孫　高名薫物合好士也と云々

一宜陽殿　日華門の北也。紫宸殿のつぎき也。累代宝物をおさむる所なるべし

一小のもんの別当　花　殿上の

家司や房ところ・文やの設あるどころへようてのひく。
紫ごの大方源氏の宝家のそうしまうかた
一きやうくるかや 琵琶 箏 笛 琴 笙 横笛 篳篥 和琴のそうべあるをそうや
一きんいごそうへ 琴よいかのきうかて
撥を二よい斤筆三よい水字硯四よい蒔絵彫透よい鷹鳴鏑
是也
一まうけるまうまうまうけるをうまうまで
四十を揃て仕とりてうまで
一まうめぐりうまうやう 唐櫛笥 唐櫃 唐櫃
一ぎうひめ 論儀ぬべし 一条殿
八宮の浪・往還も絶うをあぐ 新装束
一平 まんがのうち八宮おりまう 兵部卿宮
一平 あさうまうまうれめり 招ぬる君
うるさきもなうまうまでこさやも
一きんのふ 琴掻や 何 今更天磨ごそれ若垂の女君あるを。
九条右亜相のれやや・延喜帝門のれ女・勤子内親王ハ則九条殿
の室うるうまうて・延喜のれ門の勤子内親王
一うるさをまうる筝の箏をうまうて・今のれ頃よ。
六条院の女三宮よなをのひし琴ぬ語ごうるうまうと。
平 筆の毫やや紙・クまうまうと
一きやいとうと 碁聖・備前掾良利・肥前国女津郡大村
人やや・家して名寛蓮・弘三宮六院 貴上法師・寺法皇山を

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 857-120
ガラス使用

えのみはれともそけうよう・大和物語
一ようて・墓聖とのくら・延喜十三年六月廿日・墓聖奉勅作墓式
一　献之云
一　尾ようとうて・銀を名心をくこんとうち
一　ろうつき　黄泉也　日本記　侍奉舞童のようつくう今年
一　陽釈ようこひみくう・それをうの海舟ようう
一　ひしてくけれ　一きそうへ人を競也・あくそか心也
一きそれぐね佑よ一歳人を云也むこの笠量也

ゆ

一ゆきふ　文加と書也・ゆきひもものくるで　ゆれ
一ゆげいの今峰　歓喜と云也・矣をうくう・そうを和ち

古漢門の号矣を学ようつきうようて・ゆげうをいくを
一今妙いのよ也の内侍の・織物をうをを中うを・昔も
一今妙と号ち・佑良已下の女也・義人をいうて
一突奈祭1今妙つくひ・義人づひうてあうる
一ゆうづく夜　夕の月夜也・夕附夜方
一ゆさくひりくう也　一ゆうち
一善悪ようつる初也・ゆうるうをゆうをいう也
一ゆいうん　遣云　一ゆくうへ　ゆくくの心や
一ゆうへ　ゆくくもゆくくち
一ゆふつもひもくく源の名をおうくうのふを云也・ふへな
一ゆくうくうのうる・初ちぐくうのふ吹べし

一ゆつる 弓弦也　一ゆるひ 寛也 ひろき心也

一ゆくてのほどに ついでに深のとをせのかすや

一ゆふつけて ゆふかけてや 晩景の義也

一又ゆふのまうく もろくとしたる まつむを云也

一ゆふさりされ ゆふさりになる也

一ゆるしいろ 紅紫ハゆるさゞると禁色と云也。あかき紅などをゆるしいろと云也 紅もうすき也 制禁にをよばずといふ也

一ゆるひなき 心ゆるしなき也 無由断也

一ゆし結 由也 左のかたにて 射れ糸をとりすや ゆふ心ありや

一弓のけち 弓結也 踏哥後宴弓結也 それを大たにもすね ひてもらるゝ也 負を紋を菊の花のくんわう也 小弓を勝負よ

いはゞゆふの心也

一ゆふまつけて 復令霊國忌部祖天日鷲神造木綿者 某記

一ゆふだすき 木綿を襷にすると云也 旧事記云以天香久山之天日蘿懸為手繦 古語拾遺以蘿葛為手繦 といへり

一ゆきふかき 雪深き よしの山みわたさんともよもまろかうれ吉野の山ませう

一ゆきまろかし 雪圓也 とももの方の義也

一ゆふさくもくへんうるも 劉晨阮肇 対詳也 天台山へ薬をとりて桃を取て食し 山里をへ行て仙女に逢 半年を夫婦と成て旧里に帰れハ七世孫にあへると云 劉晨阮肇二人也

一ゆきかゝるき かゝる花さは 延喜

帝の行幸などさだめらる
一 ゆうよとどろくうんしんの夢
一 ゆざけさ ひろくいろいろきこ
一 ゆすうつきうけの君 ゆすうつ
きい鬢ずらいの君やうげの君いと
やうちうちとおもひ
一 ゆうよそわて ゆうよそいを紙
さうそくうちうちや 琴の
一 ゆーしあんすう 由緒ゆさいゆう
きれやおんとい押こと也 琴のこ
一 ゆるふさるけれと ゆるふい調よの
ふようごぢれそうちうち拍やさ
りんと也
一 ゆうさやうげんうう 天與
善人吾不信右將軍墓草初秋 紀在昌
是い右將軍 保忠也

まを作りうち拍やた大ど 吋羊見 ゆを、代とそうかひ韻字なや初秋とあうを、
今おうこうてあとーと禍をうれ
ひもれいが私の字ようてい手ふ節 お遣もなよ吋分の家乳よまうー
さいひくうろ心亂多ー、又た事多をも廣名よ今吾將軍さ又
心拍はのふ也保忠よ心うろ祢ようう禍給也
一 ゆぐさえさうー紙 ゆぐけさいう
うううや河 寛吉
一 ゆめべのちよさうふるげあう
一 名倍ざも代ふ祢拍あぐ
さまでつをけうや倍ざもうてそれ寺よ亜所ふ
ちとうけう面白ーこう
一 夕れ春 新家食ニ名利夕陽
死ニよ縁ふ云をいひくうろ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 857-120
ガラス使用

一 所さおりて ゆきみつき汀のふぢも（こより） お有八摘添もちてゆめべし（ノミヤ）八条
おもしろくまさめゆくえまもさとも
一 ゆすりの名妙（なかし） 髪洗ふ（くしあら）やうをあるひなみなかちあるをも
一 ゆきもちて 動や（ゆるく）
め
一 めさまし 竹冷眼（ミすゞし）とみて
心もとなし
一 めづらかる 眺望（ながめ）
てきり神や
一 めづらかる 眺望（ながめ）
比叡の神功皇后松浦（ジングウクワウゴウマツラ）にて鮎の（アユ）
めづらかる 作りもの 瞬（ミハリ）もおしめづらかる
一 めづらかる 馬道（めどう）かひろきうちにひろきなめし

一 めいぞく めんぼくや
一 めすらかれる 月のと 朦（ル）うる心地せ まぎれもの
一 めぐりあ 瞬（ミハリ）めもそすらや
一 めいもうれ代々 弘宇（コウイン）源氏
一 めいわく 親行（ちかつら）玩（もてあそ）同（おな）く 桐壺（キリツボ）を
ふるべき元（ゲン）奈（ナ）仏（ホトケ）元慶（ガンギヤウ）四年
や 干時（ときに）大臣や 毛（モヒキ）擬（ギ）する
一 めづらかる 課（クワ）や車（くるま）
一 妙法（みやうほう）もの 別（ワカ）る 弁（ベン）尼（ニ）
一 めづらかる 世俗（よのなか）
一 めでめ 目（め）や
一 めでたかる 感（カン）ずる

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 857-120
ガラス使用

一やうやうまめしく。めでたき也

一めしつぎとハ　西宮抄ニ院
文殿ノ中ニ随身勤役行召継養時云々今案親王家又召し
継或ハ宮明親王嫁娶之時召継ハ下家二方を録するの由見乃
記にみえたり。白氏文のほうにも見えずしめべし又知足院猪隈院
の御子として召継を見たりしかとわたり御厩舎人
なとれ。五位六位のさふらひなとしくかへつを

一めづらしき　瞬めくるめきと同　一めもあやにめづらかなるめをする
目眩や　めづらしとみゆるなり

み

一みやづかへにつけても　礼記官学の二字をミやつかへとよめり
女御更衣もおしなべて宮づかへ也

一みつぎものハ　御調也
それとは河海抄に延喜の御代の定めにて七歳以前ハ無服の殤とて物
忌令にあるを延長七年に定めたり宮ニて忌をうくるハ延喜以前を
あらためて不審なるもの也

一みまかりても仏にもなれぬといふは　宮中にてハ
みまかるといふは死をいふなり若宮の事也

一宮のうちにまゐらんする事　寛平遺誡ニ云々不可召見者有ニ
簾中ニ見之　凡者とまて河海には宮の内なる文を遠ずけるといへり
さだめの字ハめでたずしてもよまずまじき時の事也。然ハ打まかせて
めすまじきにて見えたるを

一みやとあれ　きやさんあるとよむ也
文談のよやれ宮中にておのおのそこにいるいづれも見えさせたまひし也
天子の御やすみ所にまゐりつかふる人なり

一みつ〳〵ゆひ びんつら　一みづー 御厨
一みてぐらそうぢょ うぐひすさき神や ひんの髪を奉るそも
一みさ佩 榊 さ〳〵ずがきの心や 宮造のあそれをのぐち
一みそそぐ〳〵ぬげるさ
一みそそよ ひそうそ　一みづー げそ 御厨 夜の眠もぐ
一みそうけさうしぢやあそ　一みづー ろさ　一みいれのぼぐる〳〵 小家いたく
一みうさ 水菓や　一みつとぢて 等うちぬれぞ
まろさや
吉野と金峯山よりいで給ふ日 精進や 女房の當木の孝明勤や
一みそうけさうしぢやあそ
一みいれのぼぐる〳〵 小家いたく
一みそれの松 ねなの松 明や 多い
まてこゆうち通や

勝ぐまち 宵ぐまちて 三の膝とぐちんでろ中よ 頭まぢそりて。
三の輪をくろろぐ〳〵や
弓香や
一みやうぐのう 名香 佛よ香
一みや人よゆさて 多ハ禁中も
人ころころんとや
一みぢそやう 松れ行 褥のことだ
や 思ふやうにもれをつ
一みてもみあつよ あひそて宝るさがごとく 只髪の中れやうか
れば髪よまぐれて消うをまた
一みつのなそて今一ろさ 琴詩酒の三や 今一ろさ 酒ちべし
一みろ〳〵まいちんそて 思るひ物紙からーをあげおろそるを
ころ〳〵まいろぐとや
一みそんん人よ 涙の流るを 物紙
一みうちこれ人名 今薬れも
知ろ人よそるこそや

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 857-120
ガラス使用

どちもれびんは年ごろ人へハ宗のさかの変衣を見て裙侃するをば
うちされ人どもいふや　哥　うちうちまとはさかのちぎしなきやぶ花
鳥の嘴不審　一みそかけ　御衣掛や　衣荷
一みをむちハひとさして　籬を引ぐるや
一みちのくながみ　檀紙や　まゆみかみとや
一ゆれ八ゆう　毎年　定れるなりや
一みしおるくあはれなりし　みしおるくこハ桐壺おりけとハ源のみや
一ゆれをかハうちれ草あげく　古墳何世人不識姓兼名化作路傍土
年々春草生　承天　一みるほどぞあり　枕のうや。
月宮ようそてうめる　一みぢのしめをさく　みめごとむ
べし。日本紀にハ妃の字をよめくまちとハまへの詞よきハ白ほんのとよむべし

一家よりめしあつまハ　龍宮也　一みやこるまくへらんとも　御内太臣
保周云　懐所よあひそまのあかで母君よあひ給す事もて宮ぐ罪を
ぬそてさるにも宰府へあずされまへち業花抽流よえしるを
一みちくひよて　右のけちがひあるを
一みそひけおもうなけ　御衣櫃　おもる荷也
一家ざし注めぐり　家柱ハ蛭児どうとての給やめぐりもそれなるや
一みつのあ　三種ハ門の井の厠の是三近也
一みつそうくものかれ　ものかとハ禁中の所と云心也
一右ハぢんのそこにまぜれうなれ下づるえ　天造哥合右方例須ノ机涂
香木机。浅縹浮文織抽地敷云々花今案右方絵ハ沉の筥よ入る。
花足ハ沉をめしくをられるを空にしうち浮まそてつくれるにハえし

ずゞんかうハ沈のかうけせ云。下机とつくれり。打敷(ウチシキ)ハ下机にしけり
地敷の赤地のにしき歟也。是ゆひのくさハ。花足をくゝる
あくゝ也。河海にハ花足の糸にてむすびまきたるをいふ
なし。是ゆひのくさハあをむすびむすびや

一 松風
民部大輔にて侍りて 民部大輔惟行(コレユキ) 兼明親王二男すとうさへり

一 昔あさかか
みしかゝの露まなきれば又けふの内裏の姫宮(ヒメミヤ)に揆(?)なかりし
ましまして。昔の心をおもひて対面(タイメン)ありてとゝかりし給ふ。嵯峨院(サガノヰン)に
て久しくおはしまさればわれも人も年深(フケ)て何事も昔にかはりたると云心

一 また宮のうちもさためなきや

一 みそらへて後も松(こゝよ)松風に
身をかへたるいのちハ海(?)せんへきや。是ハ身をかへべし後世(ノヨ)とこゝにひて
ありしとや

一 みすもまきあげさせ給 香炉(カウロ)
峯雪撥(ホウユキハイテ)簾看(スダレヲミル) 楽天

一 此門(とゝめ)のかきもすゝめも 康子(ヤスコ)
内親王 延喜皇女 村上(ムラカミ)帝此時弘徽殿(コウキデン)にまうけ給ふに九条右大臣(ウダイジン)まいり
てまいりて給けり。例(レイ)なし

一 みかどさへ給へるさま給ふ人も多く
呼(?)同又節とゞめ給はず例のすまや 一節 又節を宮(ミヤ)仕にめしを
かけての昔おもふかと見えまゝえたるに

一 みさうしのうちやう 六位の人の文よるをとゝまや

一 むろう
みづ鳥のくるまどくる ゑよさをおさへや

一 これあしまうする 是をさすさすや

一 ちかつ
みづむまや 踏歌(タウカ)の人を饗応(キヤウオウ)するに肴(サカナ)とゞかず水駅(スイエキ)と云ゆ
ゑ飯(イヰ)などハ用意あるまじくして也。駅(エキ)と云ハ駅路に馬あり。水人
よい肴酒(サカサケ)など用意してすゝめてもてなしすするに嗚(夕ヘ)くるを 礼記(ナラシヨ)

おほ兼、空して罷ゆくれ　一みぬ佐ちびろるまでそ
方をすて勝奥するやくもおもくいる佐ろむ業や
一みこころとなるどもろ多よろづくいのべめづくさうのれらそ
ひごも　年月記、多餉親主云つ着地贈布衣及袴、或ハ家本蘭ニ小
禎子餉袋今年、是ハ王卿の祖父餉の穀米、布ろとろめの惚
の文ろそろう、袴も同、或ハ家本蘭地のこめのさめろともろ
生ろろ、禎子ハトよぎねろうさめのすや、忌袋をけくべし
冠い寒纓の冠をころべし、仁和荷ハの行幸、行平中納言、大鷲餉の
ち衣よ、鶴を文よめいろを、王卿の多餉のるや
一みろどのおろいろ、延も昌泰ノ行幸例や、佐ハ必ず後の絶ろ、分
一のこつい生ろと月をるもろ、河延も四年十月九日大井行幸

上服、赤袍、黄袍、秒深れ袍、文仁風暗儀ニ従ハ、赤袍着ろ時ハ、
生ろ赤袍を云ふ、袍をいろ略ろ
一みあろう　又合や　一みむまよろうち　ろ山ろハ天
みのりすそろへ云や　一みろ風のるやまう　丸ごろ
一ろど云月すや　一みろさあり中、何三種ハ黒方
結浣梅花寛教修加記ニ春ハ丁ろ加培みべしごそれバろ心そもや
ろろ云ら　一みあれ　ろあれハ玉依姫の別雷ノ夜のつく
神やろう語ニ系統云ろや、それ生ろも書則ろろをあろう
のろくろ名、神館ハろ、神聖生其中者、或れ禊、条のおの一日
云ろまあろいろ、日本紀云、神館ハ
それ禊、日ろ云や、れ生ろハ神館ろあるとろ、条時れ祓ろあると

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 857-120
ガラス使用

一みちのほどそのわたりの舞に作らせさせ　遊宴の人の事は
簟に錦をしかれたるを云也　一みづしところのうかひのおさ院のう
かひ　御厨子所別当一人領膳ア潜口女人謂鵜飼江人網代をも
執る呼　六条院にての事也　御厨子所の鵜飼のおさとは内裏
にある物也　一説御厨子所ハ主上の御膳をつかさどる所也それ
によまれたる鵜飼成るべし
一みこたちかむだちめなどもみなしる給　朝覲行幸には帛袷をたま
ふて上皇を拝し給ふゆゑ　一みづからの心よりあられて　叙三昇
唯一心に無別法のことはりなるればさも心をとらるれてあるべ
きなりあらさるや云る　一御張御末法　張り付戸内に御座
の脇にくるまや　一家の権佐　中宮の大夫などいへ

かけ也。院の御方にも中宮をもかけて宮仕人成べし
一み給ふげんにのちも　源の身をあげんとの給ハ夜ことに御開まで御ゆ
るや。されどもちぶかせさしにけしさひとる心也
一みづから此舞楽ハ　水鳥とハ鳥ねとせんとあや。ともつかぬとふ。
源の心ハうけらうぬ此心也。萩の下にそかしきとなれとは。紫の
上の萩またとへていふ。其紫山若枝国若本也。是ハ六夜山を云也
一御馬罪也左右比むかひのつき六衛府の官人
を衛府。左衛府。右兵衛府也。是をも左右馬づかさ六衛
府といふ也。此六人成べし御門よりも六条院へよりの馬也。先例
河海花鳥ニ委略之　一みやび　風流ある事をいふ
一みこたちも施入し給　琴もひきともつぎ進也

一所 みやまおろねぐ〳〵 紫上源氏(ミヤマ)をそうる女
ふ 女三宮(ヲンナサンノミヤ)どの 琴(コト)より 河原(カハラ)の夏鳥(ナツドリ) 荻(ヲギ)の葉(ハ)の一名(ヒトナ)や
一 みくさゐそぐ紙 六条院(ロクデウノヰン)の語(カタリ)
の四のすていくち 花(ハナ)の一名(ヒトナ)又(マタ)葉中(ハノウチ)をもいくる哥(ウタ)ま
一 ゐそぐるよいとおほく 花(ハナ)の神(カミ)ゐそれを楽(ガク)の名(ナ)にも
一 みふ 琴(コト)同云(テイ)ゐ 討(ウツ)ゐそ 百戸(ヒヤクコ)云(イフ)民(タミ)をつかいるいふをゐそ
民戸(タミド)也 千戸(センコ)百戸(ヒヤクコ)云(イフ)民(タミ)をよせてつくるところをゐそれを
討(ウツ)るもいふ也(ナリ)
一 みちとせにめぐれる 皇帝(シヤウテイ)死後(ゴ)
心(こころ)うるやせ 此(コ)世(よ)に生(イ)ける人(ひと)をいふ也(なり)
一 みをもこむろこころ 琴(コト)おそろ〳〵そぐろさむこと也
一 みこころあくまで 二弦(ニゲン)ゐそれ心(こころ)也

一 みぐろ〳〵びやうこころ 心(こころ)ちといふ心(こころ)ひやうし 拍子(ヒヤウシ)
乱(ミダ)のすゆべ〳〵
江別(カウジン)云(イフ)事(コト)ありて 左遷(サセン)をうけたる人(ひと)の
が 商人(アキビト)のまぎれて 京(ミヤコ)へ来(キ)ても 琴(コト)をよくひく人(ひと)也(なり) 実(まこと)をうけ
左遷(サセン)の年(トシ)をあらはしめうたふ心(こころ)也(なり) 今夜(コヨヒ)風(カゼ)君(キミ)琵琶(ビハ)語(カタリ)如聴仙楽(キヽカセンガクノゴトシ)
年(トシ)暦明(ヘキメイ)といくち さやうの心(こころ)まで
一 みちをうくゆうげて 荷葉(カエフ)
うくゆうぐそこ 蛮(ミン)の方(カタ)は 日本(ニホン)の方(カタ)をいくち 蛮(ミン)を
ろくするそ 蛮(ミン)の歌(ルイ)は 蜂(ハチ)の巣(ス)をのそく心(こころ)也(なり) それを
一 みよふぶろう 夕(ユフ)方(カタ)のそで
ありくするそ
一 みをもい 見分(ミワキ)也
一 みそそ そそをそうるみやす 此(コ)を二弦(ニゲン)ゐそれ源氏(ゲンジ)物語(モノガタリ)五十四帖(ゴジフヨデウ)

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 857-120
ガラス使用

二季。春時秋の息所やうにおりましゝ也とも
一みどきやう　季の御読経とて四季に仁王経を宮中にてよむか
なりとや
一みづからのれかたし　本妻の服
あるいは三ヶ月のべし給ふ私の志なり法度の外なるを
一家人ハ　日蔭のかづらにかゝりて糸を結て付る也。豊明節会の
惣名日月の光もうれ陰ざらさるらんとも世のくり
一ちひめ
三とせざるにかゝるぬ　此詞につきて　花芳呼花北にて三年
とこめあへかゝ文業の官位に付花芳呼花北に遠や　愚案此詞
ハ業の八宮へ参りあひてより大君に心をつくしあふまでのりを
弟子の地におりしきやうにもまめやかなる宮にもころよきつゝ
まつかのかくりを給ぞかりにあかぬさまにるまでせのやうなれバ

業の年数官位もこれにおなじ遠き所の人の心にもかなふべし
一みくるまあしこそ　中ぶちをやさしくゆきたる足の労ゆく
志のかりし
べきなりや
一みやうかうれいと　行香机四角に。
結糸机にも多く色紙してさぐりにや
一みくづきねの　うへおきてそて御へきへせいくう
一みえもつゞふ　よ行の人へ心をきよくあるべし
一みそぎしあさぶ　父母のごとく思召をかざりありて法度なれば深く
さらに行くるさや
一三ぢふよくして　三條四條や
一御車のりて　本式の糸毛の車にや
一三重がさね　女の装束は唐衣に細長は貴女着く物也
旅にかけきとそゆるや。三重がさねの唐衣は中倍あるをいふなりや。

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 857-120
ガラス使用

一こゝろ小腰引腰也・衣戈白戈・或打濃ホトヽキスリ
哥あつすや
一みゝ人のもぞ拍人形也・梅
哥
一みそぎ何せごよいざさん もぞ拍をごめて・切米る身物あれば
いざ・汝等をうしろての哥ちるべし
一此車もごと例もて 親王車
一家まの 八家のといひつゝぐ心
一みちそいもちるくぬすべき
一みつ有 蔵よ今拍を頭す
哥
一みをもげ 引出をれいるか
一みやこ鳥ごぬ人よ仏ろ人

ちゝもと
一みあり 此餐也飯をあらゞ
ちゝもと 法師の衆よ飯ちへるごよ
一みちゝ 水漬也
一
一よゝめ〳〵ゝれば よ雁しゝ
一〳〵ゝさ多房此めれと 文投よふゝ
めれもと松皇よるべきゝ紙・禁中へ星よめ〳〵ゝをて此使ふゝ
すゝ心うべし
一〳〵ゝれち 泣るを湯壺ゝゝ
一〳〵ゝが心ちゝさ ちゞがちる心ちゝさ
一十二ゝて元服 人生十二を一周ゝゝ
例ちり
一〳〵げいさ 拍壺のゝゝ哥源景

舎也舎ハ殿の名也

一じねん 自然

一しつゝひ 祠 断理 祇仙房

一じち 実也

一しんそ 信じそや

一しぞく 属・親也 殺をいさめる

と云也

一しれ 拙 愚人 ぐちなる心也

一しんでん 寝殿也

一或アつの女の姫君よ飢かげあり

一しそ 此哥 拙説よそしずかしゆる露にすられぬと雄の巻にある

此時分よそてつかされしうどとしこうかそよるを雄ノ秋院とあり也

一しのゝめ 夜あけ方を云也

一しかく これくされ心也

一しろきうすもの 衣の袈裟也

一しうねき人 人のいひすせきうぬをもうねきと云也

一しるまめか きてあるる所也

一しびつかる 拙 ものを人にかさねけて拙也

紕うちゝや

一しをんいろ 紫苑色のこゑよ

うすもの裳也 もとゝん色ハ面ハ蘇芳 裏ハ萌黄也

一まうさへの衣うつ 八月九月正長夜 千声万声無止時 白楽天ハ

衣のかたや

一しろきあわせうすきとうすくハ

紫也 色さあはせのきぬようすきものうすさあるくや

一しのゝ若の 影ヶ生る子や

一下けいし 下家司也 殿ある

つるまつのいだ大臣殿也

一しゝまぬれ ひさくとぬれる也

一しほじこめる 志ほあれる心也 年よるも拙あれるを云也

一しはぶきやみ 咳病也 いはきのすや

一しゝくりつゝ わりなきと也 ちりしを切てあつらしてきて心地也 おそこなひ

一まつ時ぞとや
一しゐて執じける心也
一しぞきそ ようぞきそ也
一しげく 試楽也。楽あるしや
一秋風楽 盤渉調也
一正下のかい 四位正下ノ加階也。楽の時。又ハ
正四位下とあるや。かいハ加階こそ。けふ官せすむるを
行幸なども此時の例なり
一しきれぞて 源氏のちかふるを
の給ふ也。いかなるぞいふ心也
一しふもいとつくりて 語今案
云ふハ語也。語ハ衣のすそすそ也。興書ニ下がさねして語を引給也
一しあさねのしたかさねのえんじうつし。旧記三礎の日。勅使
云つハ源家末を奏も馬ニ付つ鞍。或和鞍を用。杏葉をつ
くるや
一しちるとも 女車ニ搦立す
も例なりけれども。これハ態志のびの心にてけるとも

一しられさはらしつらむ さはらしつらむとよむべし
一しもれちれしつし 鴛鴦瓦冷霜華重とすしとあるを白
しとくりへうる。給ひす所じまる
一しめれけり 注連日本記 かざ西にあひしらひ給さまま
一しもかく人 年ふりてもなをあかく人とや。又もしあらんべし。定本
ままくさ柴振人也。幸れ柴なるとさあつもの紙のめだけのおや
一しんぬらにあるいけさ 舌早也。淡付也
一しずみそおかへても 河光源氏大将在納言むかしを思る也。
ひ所は隠居をとりし也。古来赴謫之地也。人ハ配流の宣旨にあひて
左遷するを。今の源ハ讒にて。それと派なる籍居をこうしや。周し
云旦東徙の張を云へけれ。孔雀の衰奥もれ例なる。又行平中納言も此浜

さうし。花　菅丞相西宮左大臣の太宰府に左遷せられ給ひし所の
波国へなかされし例をひきてけり此の也

一しやうでんにてあけくれ見しかたひあふ　河　聖廟宰府に於て流し給ふ
断れ精霊まて所以法花経を今時讃給ふとふと云々

一二千里外故人心　三五夜中新月色　二千里外故人心

一しかとるとつれなき人のひたひなるやうに　史記曰　趙高欲為乱恐群
臣不聴乃先設験持鹿献於二世曰馬也二世咲曰丞相誤邪謂
鹿為馬問左右々々或黙或言馬以阿順趙高或言鹿者高陰
中諸言鹿者以法　本作　拳　始皇ノ

一しかれのちの夢　胡角一声霜
後夢　漢宮万里月前腸　昭君の心を作りし詩をしのひやかに給ふ也

一　門　しらさかし河海　源の思ひ一かたならすありしぬや。それを人形ありけん

給ふ也さかなき事にさくらのまゝ也　一　十三日　夢れつげ也

一しつまをさきてそとかうしとくくそ　河　孝経曰不退有咎

一十三日此月もみやうに　八月十三日也。面白くなと云也云々

一　急合　亜三位　此物語今世に不侍　一十四日此日海日此日をこちなきつくべきし
十四日善導十五日阿弥陀晦日釈迦念仏常行三昧也まうすに月
よ二夜やうのちごなりこうして此人母なりけれ

一しもうらまさなくれさん　花　着袴のうけ也云々

一しあさか此風　中臣被の科戸風　乾方吹風也　天の八重雲を吹拂かことし

一しつくつけ　秋院にて候ひし事給ひの給へる也。尼に初給ひん
の思ひなへや

一四位にありてんと。親王の子は
元服の後従四位下に叙せ源氏君は此子の源氏の同例にあ

らず故き親王のよう准して四位ニ叙しられんとぞそうらふれども
ゆるされず例ありと申して四韵　四韵ニ兵八句の作也
一史記　百丈寒　馬遷作
一或ものかたりに此七月九日申記ニ
それもまでいるうず。夢ニて何延喜四年七月九日申記ニ
一或ものかたりに此七月九日申記ニ
三日。或ノ有養有試判史生ノ判及ビ才者二人ハ下略之ハ前試ト
勅判也。延長。應和。康保ノ例也
一ふるく観世音寺　在筑前ノ国観
世音寺別当ニ万葉ニうたハれたる筑前ノ国ノ海満誕ノ観
一ふるき物語ニ。
一ふるき一ふしをうたひて何
そのつぎをきゝたれバ。細也。云々と答ふ。
ゆゑもなき物也。哭。泣ニ一定ノ心ニ
一ふるき　実法也
一ふるき一ふしをうたひて
とのみいふなるべし
一ふるきことをうたふ　ふるき文ニ
ふるきことをうたふ也。文ニ
一十三日ニハ河原ニ
一ふるきものゝ　何ニてもふるきを
一ふるき　河　蔭
一ふるき　白細布ニ。衾ニ猫ノ細也とあり。
一ふるき　実法也
一ふるき　ふるきことをうたふ也
一ふるき　ふるきことをうたふ也。文ニ
一十三日ニハ河原ニ
一ふるきものゝ　何ニてもふるきを
一ふるき　河　蔭
一ふるき　白細布ニ。衾ニ猫ノ細也とあり。

かをもらげんや。花と例と紙うへの
一ーしんてんれうちのぞをも何のころ
月十七日、陽成院は賀寝殿西放出に今
桑蓬ノ弧ハ二条院をとこちるころろ
一四十る四十賀るれいやひるぐのも
一ーんてんのひぐつて畢西のいのぐ西は鞠のころる。
桐壺いるるこわるもの尤今ハれるれおりやこ寝殿南む
さく書こる南のふるるや一ーほれろ投すこをかりて
新撰雅ハ紙の投をこーまこけること芦いふの投
をるこるおろろや警一ーろくれろ萩でろやさ
て東接ニ投こするるきこ人もて。ろうれ人

のまひこるこるもるこをいくる。畢何海よ人もとけ里。不用
ろく人も拝ふ舞。宴てハ朱雀ニ帝ニ御
乗ニ人等も舞る。る先御ニ
ニ進ろぐ吹べし。向云河海よ侍署堂ニ新典式未物語
てをこるろ時。萩の投をおるりる。萩をろぐるひまよ
海凡び琴ニハ朱雀の事る舞ニ人萩をろーろさけるや。一動
此来一夜やこ。向云朱雀のるれる舞ニ時ろの乱。一番
合點こ
一ーるねのるこーまこひろ一ーろうぐ。うろぐやし
ひろろこよるる。
白氏天自吟詩云。冬十八翁方有寝枝思堪喜亦堪驚持盃祝

なタノゴ　ツシミテ　グンジン　ニテオモテニ
額をに他借憤勿頓悪似涙ノ傘ニ
キヨシ　三元
けて。そ名生涯と号して。そうよむ
サイキ　カク
うて芸をするれ。めでる　一しる
そうり中のせい　和琴ワゴン　弟二の
すむし　一七そうの法服　袴ハカマ　後朝ノ
へのぐうをそうむとも
ライバイサンケ　タクタク
呪孔二孔唄散歌　堂達ムセ修俊者も
一しるぐねぐうりるとくうて　垂衣の下よりぐねまする
いうるめとうう。西家ニ云。二鶴者垂衣下襲裾後ニ
哥幻
一しでれ山　十王經ニ　死夫山ノ集鬼神
一しやくちやう　婦治承三夜鍋救。即活よもう。亦孔祝ニよりり
竹川
一しのふうとも　酒ヲ心ヲ　一しといふむ　白氏文集十四。

知歳白浪ヨ三東事是君詩事是書經年不展緣身病今日開看
ハレヨ　ノタメニケフヒラキミル
生蠶魚　勤よ仰くうなよとも
スト　ヨ　コヘ　ウ
哥あけうう
一しるべを一　栗門者ケ。くうてまでふと。大ぬのつくされよのあ也
アハナイシヤ　フキヤウ
一学不輕ぞんうも　法華經不
ミテヨモボ　サツタウヨサニウ　フキヤウボ
者何論陰呼行菩薩道滿得
ライハイ　しるくう。受ハ一切衆生の仏性あ
て。ば廿四字の偈を唱て。四方ニ
哥さうくし
ゐれよなどのくるまや
一しほうるうまれ　中名乳ニて
勅ニ出ぬよい弁が袖うもとうあるとなる
一哥れてうや　これてうハ級照　是ハ方策記　哥
一しのゆひ一　うさ無へとひ一
へくれうううとも
ことはまうそあと。いで嬉ようう

一うちうさうぐうち　おやうち　一上そそん　右大弁宰相　政官也之官
と定字よりさまでまちうやどそうげさ宿あるおなどくわえて来る也
一ーらさ　新羅也　一ーうさ
うへそうとうさうや
源氏目案巻第七
一ひらみち　永一面という心也　ひらすさ
一ひろて　和をひらーうさうさ
一ひろうそおん　勅書ひらげさうさをひらうさする也
一ひとうぐう　一頭　長根牛　春秋一対

一宰参議　参議ハ天下の政をしろしめすつかさなりも八首より
三位大納言まで参議と云。宰参議とは宰相にあたる也　三
四位あたりのまゝ也

一ひとうるさき　無益相無益貪相
大殺説也

一ひたひがみ　昔ハ尼にあらさ以
とも今のやうに髪をそぎ尼さいひて喝食なとれやうに
ちゞむやかゝまでつゝほどやさかりよりひさいがこせさくうてさる

一ひそかに　吾出河　頻蹙人のうす時口元をゆかさむ事
を云也。又年老ぬれハ口のすけむをも云也

一ひらきいるもの　此詞ハ馬の羽をおうひかけ猿楽をして行く
ろひてあそびくう舛也

一ひたあくべき物のかたちに机帳

一ひとやごもり　直隠に行ゆ人とも
惟也

あくこゝろ也

一ひとやりならぬ　人まかせそ
あさき也

一びんなき　無便也

一ひげことゝのへ　桧木をくゝる柾也

一人となり　源氏官位などすゝみてとや

一ひとりおもてと　こそれはきあるさこしハ物も色もあかいと也

一ひあやうしと　今もひあやうしとよむ番の者の声也

一ひしく　糾也

一人の国　他国也

一ひが物ゝて　僻者也

一ひとくちおしき　重さにあつかう心也

一ひやうふやうの文　紫の文字ハ或ハ云々也

一一そう　一族也ひさうそん也　紫の上ハ按察大納言の一族也

一人めかしき　文字ハ体字也　人めかしき也

一ひなび　夷(ヒナビ)ゐなかびたるや　一ひとへつきもよほされでび
さしや晴(ハレ)がましき也　一人のとうじまで　おほしやれる
人のみつぎまでの外ハかるゝ人さしつまづきて　いくてちかひたる事ハ
物ずかしく青海波(セイガイハ)ハ唐の楽なれバ古めかしくのこりの外(ガク)を云
らきあて　かゝる人のとよみにあへるとむ心也
一ひやうてうをしらべて　平調(ヒャウデウ)ハ箏柱(コトノヂ)をさげてとられたるや
平ゐてのちの人も一越調(イチコツテウ)にて又箏(コト)をは一越調をたて
かよはし一越調を一越調とて二やうあるがら一越調とは
まづあらはれ方人よせてとるや是を一越性調と云又保曾(ホソ)
呂倶世利(ロクセリ)ハ箱三ある越調の楽也　平調(ヒャウテウ)の曲まあるず先二(ニツ)平調まさしくて
調子ざる様をかへて　二呂(ニリヨ)たくふまちをして　わざるくをかさひり

れなうあまひ海去る越調と云ハさうと平調にて呂也　此上観喜院(クワンギイン)
洞院(トウイン)大写(ニヤウヱウツス)うす　文平調のうゑありぞのよるや
一ひやうし　ちうしとよむや　拍子(ヒヤウシ)ちうしとはうろある事まあるま
一人へまかひ(あまひ)　河人給(ヒトタビ)　出車(イダシグルマ)をは公方(クボウ)より賦(テン)ぎられて主の人々ま
まづ人給どをけりくる也　人給ハ乗替(ノリガヘ)や　枕草子もわ似たる事ある
一人ひさまもあまるも給ぬる　夕顔(ユフガホ)のかまい終宰(ジウエシ)の笑なが
不二見給ふや　一ひとゝちまて出立かふ　女嬢(ヒタミナ)也
ひとすしまと云同心也　一ひとこゑや　火焼屋(ヒタキヤ)　神供(グ)し
うしむつ前也　一ひたけ　河・花・若は卿ともに(トモニモテヒタケ)　朝餉
叩(コウ)あまびすしきや　一ひぢざる　笠もとりてあべむし
て袖らざしうるらし也　一ひかり　長和二年三月雷鳴(イカツチナリ)

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 857-120
ガラス使用

氷降大和梅雪あられまじるや

一人のみ千代を経んと祝ひてや傳説未古昔・五陵計更有哉

ちぎれ松ゐるに依てや　一びらほうしよりて花

蕊ひらけあらく法師や　商時の盲目のごとく

一人のみつもりせ中ちぢまりあり　濱高祖威光人を

竜をしよりて趙主如意をもみよりてそんとそ一時呂太后

とそれうれへて張良云しよりまりて

四皓をめして　皆をつれて高祖の前より朝しおる高祖太よろこび

一ろそく羽翼已ありて憲帝をうしなひまつりそえ

られさうしうをや　一ひらぐうよ　おをけずらるを

ひろあるれ中　中あしそや　一ひらそあそるあり　源のあをを

そくそせのみ紙根て　紙うりれ書てうるべうれをや

一ひと巻よ　時　結句の番附衆さあしそや

一ひらいちくんのおよすうれけそ　天満哥合左方洲濱紫

檀机藐芳下机紫綺地發云々　濱檀の前

今て藐芳のまそてつわうけうくる　今紫左方つくるべしそ発

和ばしのうへの綺せ打安い机ですへる地発や　それ蒲萄染去

うれ綺せ　赤き机の足藏るの种や

一花ちる袋ひらそそよ　哥合よ負指てあるや　天満去

打給よ　今紙若枝を例須ますへて　みそれ前よりく　紫の枝

一ひらそれこぐうそ　次生経兒雖

まそてみをとわうるや

巳三蔵面卿不宣　曼和花

一日のりそよいそれゆうんしう。

陽成院の御母ハ二条后也。業平中将ちかづきまいりて。伊勢物語にみえたる
事それをうしろに侍る文なとにかきたる也
一ひうしろめて　引立て也
一ひさしき世中宮の御子人々に宮の山
桜を手に云。志ハ手すれ十日ありとの様に。宮ハうしろにかけたる紙に使
に或夕延応陰ありてわれハ志とをハ。いかにして物なとハいつまで宮の山に
くらせ給ひぬるかたをそれなけれと思われおの室にも流れてきこへて中宮にも
ろきあへの御前に候はれけるを　晴てはりを物すへかるれ
一ひさしきまくらへかくらふ
非常侍従。礼家ハきやうまそれなるをさ云也
一ひげの事　河ハ蘿葛為年穐。古詩拾遺。諸社の祭にもひけなとを
髻にするや　苔の類也
一ひたまもしかく　厠なとさうやく
洗者役ハひすましこ云也
一無落ち　照宣云はれしつかれし

人の名也
夜のとまらぬ人給也
一ひのよそひ　ひるのよそほひ装束也
一たれつきいとよしある官人
官人ハ将監将曹府生を云也
一人まかせうんそそハ畢　崇或か給をさを心にこめて。富言を述也
一ひかう　日本紀　夏氷を氷酒に漬して用ゆ。氷水是也。氷室同ひ
やうなる氷也
一ひさいのちかき　ひろさや
一ひちあつすかれ　一両戦畢の事也。波立出よりも也。無心哀名也
一ひらうかも　年張
一ひとりおてこかし　ひとりとも
うき世の事にも一獨とつくる也
一ひちくるくのつに　桧皮文　柱の名を縁ある
一ひちかつるも　引切也
一ひうえき　緋倉錦。令を織る

一ゑぶ錦也

一屏風四帖にうちれはりくをかへる。

うちれたるとハ勅筆の絵也。又哥をあそばしてかゝると云說あり。うの為

やハ唐綾にてもかゝる屏風也。うすゞみとはうすずみ也

一ひきかへとろげしくやめさるゝ様也

一人ながら 忠臣不事二君。貞女不更二夫

一月一夜にてもなむとと 往生礼讃云中輩中行中根人一日斎戒

處念蓮 吾導

一ひかりくれ 光君嵯峨院ニ隠レ

居し給二三年後つかうる昇霞し給ふを云也。天子崩ハ昇霞と

いふ也。此巻ニ幻巻とし九年也。其の年幻巻にて五十歳也。六歳

より十四まで九年也

依滅度薪盡火滅

一次をけちくる 法花経 佛也

一ひきつけくる 喜撰に比きる

一ひと氷魚

てうをかつかず。無常の喩にかへる。何ぞそれひとむしにあくるふ

心もてとハひとむしの名にかへるを云てハくそ有真なるな

れ。只氷魚ならでは何れ具くなるべからず也

一ひとむし 蜉蝣ハ朝に生じ

一あろじくり 八丈為鴈 八丈がゝりけちくくの心になり

一ひごんのそて 時正ハ吉日なり。何も彼岸ハよきさまなる也

一ひこぼし 彦星。伯に比きる

一人の香をかなん香れぬか 反魂香の事也。李夫人うせて後

漢武帝甘泉殿裏に方士をして霊薬を合をしめて。金炉

に焚しくずし。其の煙の中に夫人の姿みをしる也

一人ハこれ 神の御 出羽の名所也

一やうなひじるさるれ　聖人（ヒジリ）あるべき世とも
一ひさしき車　庇（ヒサシ）の車　糸毛（イトゲ）や
一ひらうげ　獼猴（ビセウ）毛車（ケノ）　一人（ヒトリ）もえ乗（ノ）らず
一ひろびろしく　乳廈（ニウカ）
一ひろさ　亜字（アジ）の欄をつくりて休息（キウソク）所（ドコロ）
一人なりとも　波羅門（バラモン）の法（ノリ）を自在（ジザイ）にて
一ひつじのあゆみ　屠所（トショ）の羊（ヒツジ）歩（アユミ）
屠所（トショ）へおもむきて行歩（ギャウブ）
一人のうむとのみす　解冤書（ゲヲンショ）曰（イハク）

一ひろごりあやうごとして　孟子（モウシ）曰（イハク）
一ひもろ　面鞭（ハウベン）　うつ笞（ムチ）
一人の心まどいさん　船（フネ）迷入（マヨヒイル）
一人ももてなされ　人（ヒト）遂（ヲハ）ふるまひ
一ひとりも　すゑられがたやめざまして
一ひを拍（ウツ）のみ　氷（コホリ）を六月（ミナツキ）暑（アツ）
一ひとりごち　人（ヒト）恥（ハヂ）水（ミヅ）
思（オモヒ）事（コト）人（ヒト）去漢王情（ノ）順（ジュン）
玉（ギョク）如不遇（グウ）傾城（ケイセイ）色（イロ）　白氏文集
一人なりとも　波羅門（バラモン）の法（ノリ）を自在（ジザイ）にて
一ひとりごち　人（ヒト）恥（ハヂ）水（ミヅ）
一人なりとも　波羅門（バラモン）の法（ノリ）を自在（ジザイ）にて
一ひろごりあやうごとして　孟子（モウシ）曰（イハク）
一ひもろ　面鞭（ハウベン）　うつ笞（ムチ）
一人の心まどいさん　船（フネ）迷入（マヨヒイル）
一ひとりも　すゑられがたやめざまして
一ひを拍（ウツ）のみ　氷（コホリ）を六月（ミナツキ）暑（アツ）
一ひとりごち　人（ヒト）恥（ハヂ）水（ミヅ）
思（オモヒ）事（コト）人（ヒト）去漢王情（ノ）順（ジュン）
玉（ギョク）如不遇（グウ）傾城（ケイセイ）色（イロ）　白氏文集
一人なりとも　波羅門（バラモン）の法（ノリ）を自在（ジザイ）にて
一ひろごりあやうごとして　孟子（モウシ）曰（イハク）
一ひもろ　面鞭（ハウベン）　うつ笞（ムチ）
一人の心まどいさん　船（フネ）迷入（マヨヒイル）
一ひとりも　すゑられがたやめざまして
一ひを拍（ウツ）のみ　氷（コホリ）を六月（ミナツキ）暑（アツ）
一ひとりごち　人（ヒト）恥（ハヂ）水（ミヅ）
思（オモヒ）事（コト）人（ヒト）去漢王情（ノ）順（ジュン）
玉（ギョク）如不遇（グウ）傾城（ケイセイ）色（イロ）　白氏文集

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 857-120
ガラス使用

そらさをあらはさでくはしくかけるを俗語にいひ傳へたり。うさ無気力也
れ傾くわかをちげんとせし人の老尼にまさりたる心ね叶へる也

一ひのあすま　陵園妾柏城盡日風蕭瑟。手習巻此事に引給ふ。
陵園妾に似たる也

一ひきたかし　引手海草也

一ひねもせ　ひのくれてぬる也

一ひはつ　秘也

一ひとや　人屋也
といふ事をも本にもちゆべし

一ひさうざこ　第一也。又ひさうざい

一ひそけ　ーーー物のひさう也　源氏

一ひわりご　桧破子　源氏

一ひたうもし　飛驒也　源氏

一ひそく　後成女院ひしけるの茶碗の具足也　源氏

一屏風のおもて　忠あるところをおもてと云。又うしろあるところと云説あり　源氏

一ひさし　檜也　源氏

一ひすいかちて　翡翠也　源氏

一ひやくぶんはう　百歩外。百歩は六尺也。百歩あれば衰老
あるを　源氏

も

一きうこうしのちくらるよりそうそ　玄宗皇帝。揚貴妃を寵愛して天下をそぶり此れを例無し。さうは起請の流れ

一百敷はりくにへのゆかしき事

一きうしむべし

一きうかん　百官の座を寮左に禁中を百敷と云也

一もよほしがほ　衰を催や。催泊いや

一きうこう此哥　詞のすや詞をまうしとりくるやうし哥とも云也

一わしとさうしぶす　此物と云字なくてはあらずして又うる
ちあるを一部の中に云ずるにおきて面白詞也。よくつかへそれも心

さまでもびもれいれ種不可能さ

一抱のうまうさほど添のうく

一抱いと愛しても行しても性うま

てれ寵愛と抱忌とさて付うく

一篇うも付うや

一まうまれうく 芸い種姓いうさ人もれど世おうへて

友位いやーく等うううあく人をいや

一うまれば そう人の根本の種姓をいや

一文章生 儒者のうさ時のう官や

一まや 本命や おまやぐうさいくう

一ものけ祈り 抱け祈りや 一抱げるさず 仏心るさ

一抱のうくめる 紫のこいうやうの

一抱うおそれい ううこう海

一まうどまにうち山 大内山に行

さいうくる句や

あれいや

和うまあるといへど 芸い禁中

一まれぐうぐうて おさる人のくいくことみを抱ごうや

一まこうふく 笑ままうふ

一まうこうふく 酔泉や 心うて等に細

一抱うけうう小袖をおぼうさうて 左非常いをもうて恒す

一まうこうまつれ門うもうくせ

や 不浄を不遠おや

一まうこうまつれ門うもうくせ

ますれ 漢家や新楽の野楊出在納言宮家西家左府

下技群賢うを等大弄に勝計の白氏文集序を

一もれぐるを忘 物語を張よさうるを

一文やとい 源氏信云々 哥松うを

一もろこしも和ぞき 学中れうう

のさ海もち

秦始皇ハ荘襄王のよう即位実ハ呂不韋ニ通じて

一もろこしの学のうこと

林朝作ニ平里漳障ニ遠着不遊ニ恐是秦人 秉天

一もぐれ家 大和物語云桃園を指遣集ニ桃園ニ住けり第六

月晦日ニ物うことを又指遣を

院ニ初出るを是ニ対する

文人ぞ文する人を召ことを

云心ゆ文人とて詩の試あるを

天子の出給ふても試る

その生給ふ人さ云を心うを

哥数のうこハ

一もろこしけうら国の図 菊多図 在奥列ニ

の女の親るびうをとうあ

うことゆのひを名をもこけうを恨て文うや

夕雲ふくもうあるふ理うこをもう物語

若之

一もろうけさるけぐうの 源語 天皇の代ニ弘仁八年ニ男女の衣

服ニ唐の法を用るをいくち心を家ニいくち河海ニ

哥右下

一もろうろ落葉を もろぐ

さい萎を捨の枝ようけうをいくち落葉いもろぐ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 857-120
ガラス使用

落瀧腋や。名ハむつまじきさまざまと
一月遠う仏まもらさ 花 月連ねて六通さえしうを。仏まもりたて
ひとう又仏ま親近する心もみえ。や。
ど 衾をしま。盂蘭盆経ま後生
所知物
一もろもろ 女津香や 何いや
うさ事
一まもりそ おんて 縫や 一
着せそえてのみや
勉て捜へまうちどいみ討参し。物
一もいさぐ海 汚えん人おそめおと
まうまわや。されぐう子文のを 団心
せ

一宣命ともん 猶任のまや。れ門の作を文こいそてうえのぶ
汚えま
ものへう。有まうべし 一せうと 兄をせうとえや
一せうとうくへみや せもそ打名
一せうとまうくそけう 寺冬れ日もれバ冬れ夜ぐ人の心や
一墓海波 輪墓ハ墓海波の序や。ぐれも舞あうま。南宮譜二
云ふ曲第和れば。大納言良峯宗
依勅改成盤渉調伝説小管笛
一せうとみづんのへうんめよやう 威夫人うえうめまうー行
ちくえうと。人まうれうえう必あるべーう。れ必。威ま人漢高祖の
妻趙王如意のみや。恵帝のみ

なども、つねよりもまさりて、高名の人の崩しの、悪帯位をつぎ、
のて、浪兵を治むるにせんさうに、戒ま人の眼をめさて、人疑
さるべくて、そやの中よりそれしもしも
史記曰、呂佑本紀、太后遂断威ま人を
屏厠中、冷曰、人彘
一せうとやう、せん陸とそもせ
ちやうとも、呼軟陸とあるも、暴
一せうとやう、せん陸とそもせ
一せうとやう、せん陸とそもせ
ちぐとも、秘のせうとやう、一せうとやう、せん陸とそもせ
仰ぐとやう、一せうとやう、せん陸とそもせ
一せうとやう、せん陸とそもせ
そして、明石へれむあれば、妹ま人の眼をめさて、人疑
一せうとやう、せん陸とそもせ
一せうとやう、せん陸とそもせ

一指政しめま、元明天皇の元明の治も、いつる幼主の時、指政と是
ま云、復辟の表をそうそうして、君ま政せくへ、年浪、指政を
行ふめて、開白と稱して、冷泉院十一ことれ元明うて、則れ位つ
ること、太ま元明の後、受禅の時、指政の例、清和貞観ま年中
元明ま、月八月九月、忠仁公良房指政の詔を蒙る、此例ま准ず
ありや、六十三の年齢なり、忠仁の例なりざるやし
一せんーれむもま、宣りれ名、今い指政家なる、昔い院なり
もし名るべーれ、秋の宣旨ちぐ
一せまうろ大ぐれーう、窮措也、除目四品籍ま、内豎の窮
者ま云ふるなへば、大学の元ま、年久ことも、昇進なぐ
ちめ心也、呼、宮ハ昇ヤの句也、窮途、急、日本記

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 857-120
ガラス使用

一せちゑは日うちはさしきほうにして門のさしきほうす
ハ白馬を引ま左馬寮の以下供奉する儀式をうつしたるにや
昔は毎年しかる事をえへるは良房公の時の例なるを移えへるは
一小貳任して　仁徳天皇四年始置諸國史。仁明天皇嘉和元
七月勅諸國守以四年為限。但陸奥出羽太宰是官
國始自筑前等遐在千里以五ヶ年可為任限云々
一せうそこぐう　文なとは川そし毎ぐうや
一せうさいくと　小簀
若上　一せんうんけげんれもち
あさんちんのけちんやれ所意をハ薬玩や。是ハめちゑりれ沂此
べし　花鳥余情　一せさまれるゝぬ　菩薩院
山籠のことさや　一せんといふんなど　匁の花壇や。

文游と云なきま山水などを紙包まほをさるを
一せんぞれおとゝゞいのにの先祖ま。清信公をして書了。民たる
忠文といひし人者東夷をたいらぐる大将軍なりしが子細ありて
て清信公の悪霊と成て子孫を退治しるまゝ。のにの先祖をせ
してけるなり　河海抄
一せんゆうくといふ縮　系氏名也
仙遊霞　一せゝでんま　夕霧雲色思惰也
古根号　一せんけうたこ　河内中ちはせんく
いとあるハ或ハくいたこと云々。瞿夷太子善巧日名也。耶輸多羅と
同位瞿夷也。羅睺羅ノ母ナリ　羅睺羅ハ仏出家の後六年に生れしかは
人うたがひあらそふ。花耶輸多羅をは焚灯仏の昔世の時瞿夷女
と云なりや。羅睺羅の行身ゆえひけうさうらは別の同縁あ

えべきやうもうくべき法(エ)をも
をのこそ(ライ)まの祝(キ)別(ベツ)をぞげあひ時(ト)我(ワ)が成(ジヤウ)仏(ブツ)の法(ホフ)を得(エ)時(ト)
もよ我が成仏の法をえて仏のれみ
いさぎよくすてつゝ(ヤウ)四月の節(セチ)に不(フ)成(ジヤウ)時(トキ)
一せちくわ川のおと(ヲト)をきゝてうぐひ
一せうもんを松門暁到月徘徊自(ジ)氏文集(シフ)
す
一すくく(スカ〳〵)何(ナニ)人(スケナキ)
一すくく速(スカ〳〵)清(キヨ)くぐ(ヨ)
一すくそう(ソウ)宿曜(シユクエウ)師(シ)宿(シユク)曜(エウ)の行(ギヤウ)度(ド)
ゑすやそ(ソ)
一すくて(スヘテ)郡(コホリ)のつま
一ぜうじ(ゼウジヨウ)成(ジヤウ)
一ぜうもんを(ヲ)
一すくべ(スベ)
一すくせ(スクセ)宿(シユク)世

をも(カヲ)ちやそ(ソ)てうもんなどせのくをも
一すりもてくづき(キ)俗(ゾク)理(リ)幾(キ)
りや(バンヤウ)万(バン)事(ジ)万(バン)端(タン)のつとすべ(カ)
一すきごとども(カ)女(ヲンナ)色(シキ)をも(カ)
ろれもつ(スイ)ぶ(フ)せ
一すくれうをくれうそ(ソ)ぐ(ク)
一すきもの(カウ)の人(ヒト)せ
ろ(カ)もの(カウ)まで(テ)すきやうの法(ホフ)のき(キ)
そをそもよもれせ人(ヒト)のをこ(コ)
一すくつき(キ)すくづき(キ)すくぐ(ク)
一すべ(スベ)ちく(タクヒ)せ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 857-120
ガラス使用

一すこしづゝ　すゝみたまふやうもあれど、
一すくよかなるものゝすくせなどやうのすぢや、
山ごもりやせむなどするわれてゝうちうち
も景一なほて、すゝめ童（わらは）などやうむやう
一すゞろにて　そゞろそゝ月かげ、かゝちそつゝうち
れうち成べし　一すのこゞろ
ぐうる心なし、すれこゝくゝもの
一すれうちうちやも　一すのひゝ
一ずゞちよ　絹ずやずゞ
一すゝくゝく　うちれうちやも
一すゝくゝく　うちひゝへ　すゝいわゝ
ちうべき紙、夜もれぞひゝへ
一第雀院の行幸　第雀院といおりのれ門のおゝまゝ
やゝ二条第雀まで四町を造れり
や、第雀院より始ち、宇多れ門
行幸といゝまゝちの笑のすゝべし、芸秋の行幸
せてうちんの行幸といゝひゝ
一すゝつも　知い来ちと答ゝくゝ
一すゞれ　いまゞれ、ゝやすゞ
一ずいぜんついて　陪従れ代の
一すゞろよ　そろ月、心ちずの
一すゝう　御法、行待やれのなゝ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 857-120
ガラス使用

一ずゞのこゑなど也
一すいがい　竹などにてすかしたる垣也
一すゑこ　ゑんそうなや。又すゑとれすゑこともみるべし。すなはちえし
一すゞろひとき　すゞろどのひげのくるしき事也
一朱雀院行幸　朱雀院のすまひに行幸。延喜十六年三月七日行幸朱雀院有法皇五十ノ賀と云る是をもみぢの賀に書なしたるべし。此巻に一院とあるは則寛平法皇也。すざくゐんは寛平法皇ハ延喜帝ノ御門也。桐壺の帝在位の中に一院崩御のちうくれさせ給ふ也
一すさめぬ　不愛
一すぢをもはなれ
一すさめぬ　人ぢを離給ふれば也
一すまふ　あらそふ也
一すちあらぬ　あやなき也
一すゞか河　八十瀬　ぬれぬれとすゞか河ハ伊勢の名所也

一すまひ　相撲の事也
一すまひ　此神ちうことさなひを河海に古語拾遺を引まへり　住吉明神ハ往来の舟を海より守護す。神功皇后新羅をせめ給ひし時、住吉明神あらはれて給けるによりて、御舟をまもり給ふ也。其後明神ちかひ給ふに下りましまして、おはしますとかや
一すいまつらし　神よ行ふかゆく人につかふまつる神蔵にあがめまつるとかや
一すいそんしたる人　随人とあるがゆふ事なるべし。随人も蔵人もある也
一すゞろなるまじ
一すの客ね　系図晩餌変大内
一すんさ　ぶぎやう行也
一すへさし　下ぬ心也
一すんぢ　巡流や盃の順に
一すゞろ　すまひ　たるにはいしも　ちとは体字也
一すゞ夜　まさきたのしみにひとりきらん　小野篁が記にも。なげき月のこと月いと月なきことまでにけるなまはと月いと月いうなずくまでにと

人のつひのみちは　春を待そのかぎりとおもふぞ月さへ哀なりけり

一　すさまじき年なるべし　薄雲女院崩れ依諒闇被停止也、

一　やけなき　よやつれしや　一　すけくち　中せ侍のこと也

一　すへらき姫君の　伝書抄に中納言の姫三人ありし中に一人は家服

まそすくれてる家づくへまゐらんとて出し立けるをまち母北腹のむすめ

めまきむしまへるゝをやすからずおもひて悪しうきをふくみて川

祝は姫君にげて伝書に母伝書故に伝書姫君といへり　花今案伝書

の姫君の世にまで有りけるを物そむつける今此抄にはあらね

ざりき故に伝書も主計頭にめそうしは腹をおもひけるにあるべく

られけるとや　　一　すいはん　湯づけ飯也

一　すくしがたきを　優じ給ぞとや

夜のつとめ

一　すこしをかしきかたありしを　丁子深の少女ちかきは袷なる色也

一　朱雀院のれい門あかしれい華の後　あかしれい華は夜のうらばてそのう

一　すみれ山を右のおまにさうぞくて　花今案内典外典に夢をとけるう

おはしといへど今此抄にはいへるは吉恵総へのまけ須の奇夢を

とけるすてこそもちふべきこゝろしかば心をもつてするよべし

先須弥と云は梵語にて積速高山と云、唐には妙高山と云　四宝を

もてつくれるによりて妙と云　地に入ず八方宝自地を出す八万合

てすぐ宝旬の山なるによりてたかしと名づくる也　東西南北に四

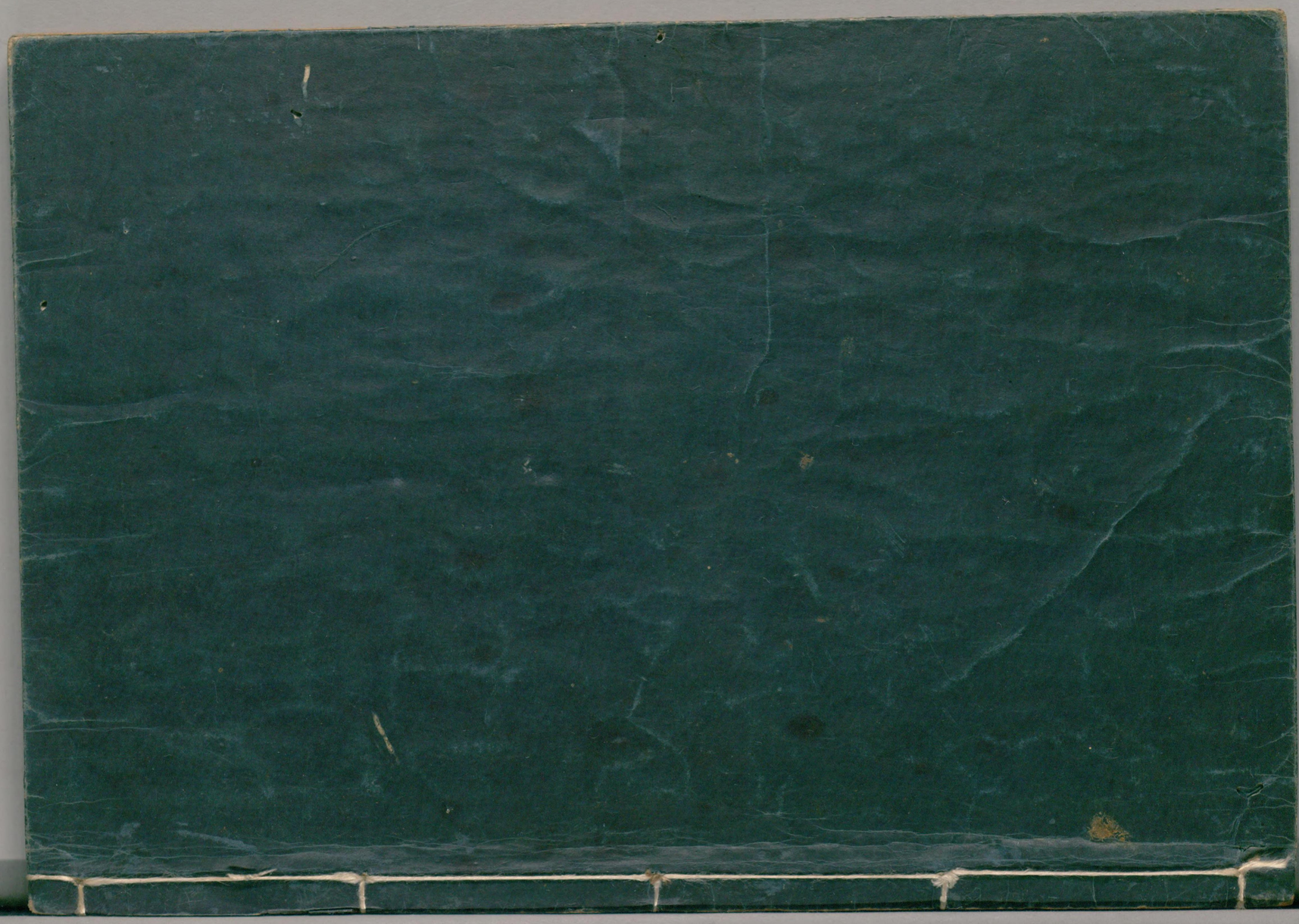
別あり日月は山の中腹をめぐりて昼夜を照らすといへり　此名入

右の夢は此右の中にあまりそうつる夜の夢といへり　是をあ

まていそく須弥の山は山にまさりていふ人あるは山也　右のゆめるさ

857
120

一すぢをかけて　一すぢをかけて
五のぐるまをしや　一すぢをかけて
ひなこ眼石ぞ玄ようち祝こ拍不書ぞるち
一すぢをひなぐ　神楽ぞ幸玲ぞ供ぬ進れ撲人ぞ七月十六七日ぞね
撲とぞ作や廿六日ぞ廿八日ぞ
お月廿八日や供ぬの供れ人とぞ集てやんずる物ぞ答渡る
とぐうてやんあうをぬるぬと云
一すぢ　役者下人や　まいぬ供の人ぬうゆへやらぬ
一すぢ　出家や　多集や



ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 857-120